

大学時報

UNIVERSITY CURRENT REVIEW

No.369

2016

7

隔月刊



大学職員も教育者であれ。(追手門学院大学 アサーティブプログラム)

特集 選挙と大学

座談会 「医師」を育てるとは——医学部教育の現在

小特集 大学改革とSD義務化

わが大学史の一場面 東洋学園大学

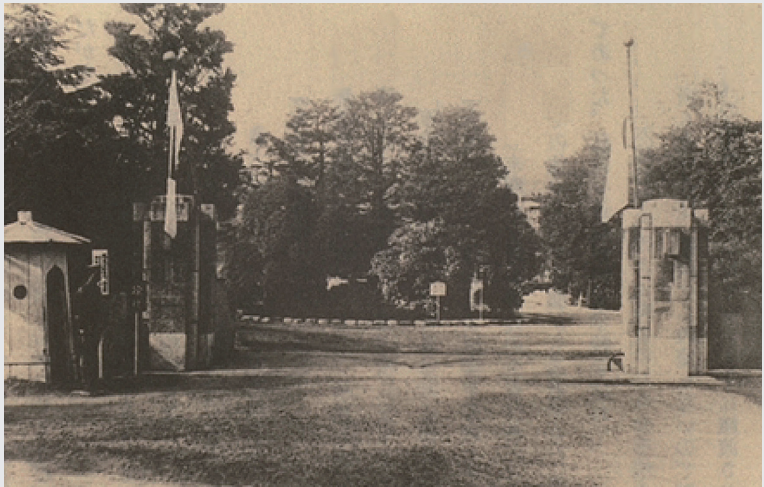
加盟校の幸福度ランキングアップ 順天堂大学／桃山学院大学／立命館大学

クローズアップ・インタビュー

スポーツキャスター・マラソン解説者 高橋 尚子さん

日本私立大学連盟

Thesaurus Universitatis



旧陸軍機甲整備学校時代の門柱



現在の東京農大世田谷キャンパス正門門柱





大学点描
お う て も ん

追手門学院大学

2016 年度開学 50 周年を機に、さらなる改革に挑む

追手門学院大学は、1966 年に大阪府茨木市に開学し、今年で 50 周年を迎えました。その起源は、1888 年に大阪城旧三の丸に開校した大阪偕行社附属小学校で、以来、社会の変化に対応した改革を重ね、現在はこども園から大学・大学院を擁する総合学園へと発展しました。近年、改革はさらに加速し、2013 年には教授会を学長の諮問機関とするガバナンス改革を実施、その後は新学部「地域創造学部」の開設、アサーティブプログラム・アサーティブ入試に代表される入試改革、新たな学問分野を開拓すべく成熟社会研究所、スポーツ研究センター、笑学研究所の設立など多くの施策を実施しています。また、社会に貢献できる自立した人材の育成を表す「独立自彊・社会有為」の教育理念の下、学生の成長支援を約束する UI スローガン「想像もしなかった自分史がはじまる」を打ち出し、教育力の向上に努めています。これらの成果は、4 年連続の入試志願者の増加、2015 年度一般入試における志願者伸び率日本一^(注)となって表れています。

そして、2019 年 4 月開学を目指し、広さ約 64,000 m²の新キャンパス地取得を決定しました。新キャンパスは現キャンパスとも近く、連携が可能であり、2018 年開業予定の JR 新駅から徒歩圏内にあります。新キャンパス取得を機に新たな高大接続と教育内容の充実に取り組んでまいります。以下、4 つの主要な改革である「アサーティブプログラム・アサーティブ入試」、「成長実感プログラム」、「スポーツを活用した正課外教育の充実」、「キャリア・就職支援」を紹介します。

※2015 年度主要私立大学一般入試（大学通信 2015 年 3 月 19 日発表）



笑学研究所名誉所長に、大阪が誇るラッキーゴッド「ビリケン」が就任しました。



アサーティブプログラム・アサーティブ入試

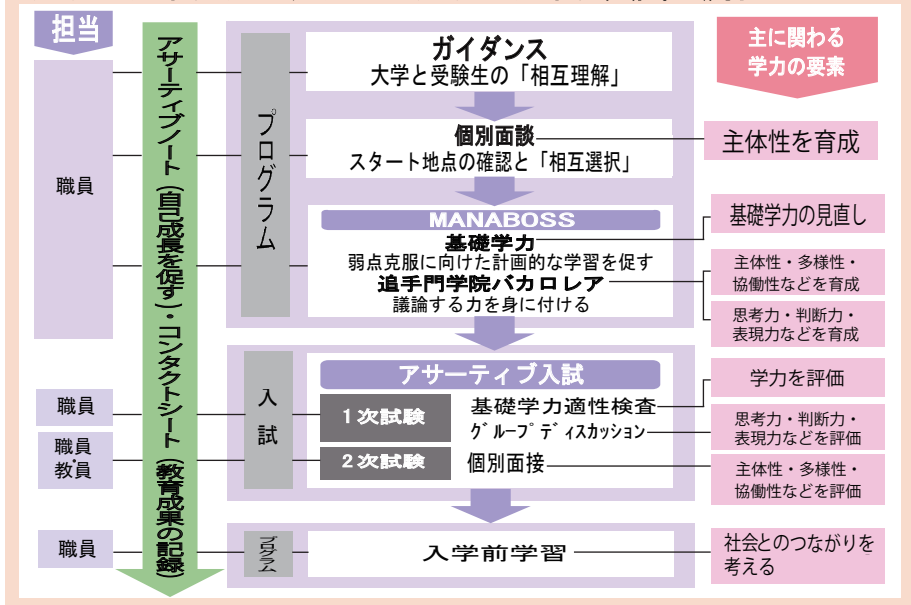
「アサーティブプログラム」は、進路を考え始めた高校生に、なぜ大学に進学したいのか、何を学び、どのような将来を描くのかなど、大学の学びに対する期待や意欲を育てる「教育プログラム」として位置付けています。受験のためのプログラムではないので、高校1年生から参加可能です。主な特徴は、①本学職員との「個別面談」（本号表紙および説明文参照）②本学独自の学習システム「MANABOSS」③自己成長を促す「アサーティブノート」の三つです。プログラムを活用して、自らの意思で大学進学を希望し、主体的に学ぶ姿勢とアサーティブな態度^(注)をもって、①シラバスの活用（何を学ぶのか、どう学ぶかを調べる）②授業への参加意思の向上（受身ではなく主体的な学び）③各種活動への積極的参加（とりあえず「やってみよう」の気持ち）ができる大学生になってもらうことを期待しています。そして、このプログラムの成果を発揮できる場として「アサーティブ入試」を実施しています。

この取り組みは、平成26年（2014）度大学教育再生加速プログラムテーマⅢ（入試改革）に、私立大学では本学のみが採択されました。文字どおり「加速」をしており、2016年度のアサーティブ入試入学者数は、初年（2015）時の52名から128名へと大幅に増加しました。

2015年6月には、この実践を理論的に検証する「アサーティブ研究センター」も設立されました。2016年4月には、「学生の学びと成長のプロセス」を明らかにすることを目的に、ベネッセ教育総合研究所と共同研究を開始しました。

※「アサーティブ」とは、相手の意見に耳を傾けながら、自分の意見や考えを主張できる態度のことであり、そのために、自分を知り表現することが大切になるという意味で使っています。

アサーティブプログラム・アサーティブ入試の流れ



成長実感プログラム



リーダー養成コース

として提供し、自らのスポーツ体験と合わせて将来のキャリア形成に生かすために、理論や実践を含めて総合的にスポーツを学びます。「リーダー養成コース」では、リーダーシップを効果的に発揮するために必要な知識・技能・態度を育成し、他大学との交流やサバイバル型のプログラムを通じて日本一多様なリーダーシップを実践します。

スポーツを活用した正課外教育の充実



女子ラグビー部

将来の目標に合わせて専門的に学べる、全学部生対象のキャリアコース、キャリアプログラムを設置しています。「グローバルキャリアコース」では、海外留学を通じて、実践的な英語力とグローバルな視野を育成します。また、英語圏出身のネイティブ教員による各種英語学習プログラムを実施するイングリッシュカフェをキャンパス内に開設し、連携しています。「スポーツキャリアコース」では、スポーツに対する多角的な取り組みを正課教育プログラムと

本学は、スポーツに励む学生が、より学生生活を向上・充実させ、大学を挙げて応援できる環境を整えるため、各種競技の体育会団体をバックアップしています。中でも二つの特定強化クラブ、八つの強化クラブを指定し、重点的に強化を図っています。特定強化クラブの一つ、創部4年目の女子ラグビー部は、社会人も含む大会で優勝するなど躍進が著しく、8月のリオデジャネイロオリンピックから7人制の女子ラグビーが正式種目となることもあり、学内外から大きな期待を集めています。

キャリア・就職支援

入学時からキャリア形成支援に注力し、1 年次から積極的にインターンシップへの参加を促し、社会との接点を持たせます。例えば、ガンバ大阪とは、延べ 100 人を超える学生がシーズンを通して活動できるインターンシッププログラムを展開していきます。最後まで一人ひとりの就職活動をサポートする体制を構築しました。



ガンバ大阪と J1 チーム最大級のインターンシップを開始（2016年2月撮影）

新キャンパスに移転

学校法人追手門学院は、株式会社東芝が茨木市の東芝大阪工場跡地において進めている「茨木スマートコミュニティプロジェクト」に参画することになり、跡地の 6 万 4400 m² (約 2 万坪) を新キャンパス予定地として取得することを決定しました。新キャンパス予定地は 2018 年春開業予定の JR 京都線総持寺駅（仮称）から徒歩圏内にあり、大学および追手門学院中・高等学校のある現キャンパスからも 2km 余りしか離れていません。二つのキャンパスを連携させ、新たな教育展開に取り組み、利便性ある立地を生かしてスマートコミュニティ外からも人を吸収して、多様性のある教育・研究の実践の場として地域創造にも取り組んでいきます。

大学時報

No.369

2016.7



大阪に幸あれ笑いあれ、 ずっと大阪50年

坂井 東洋男 ● 追手門学院大学学長

商都大阪のシンボルである通天閣には、足の裏を撫でると願いがかなうといわれるビリケンさんという幸福の神様がいます。アメリカ生まれで、顔立ちは東洋人、座り方はアフリカ人、国際派の神様です。

追手門学院大学は開学50周年を機に、このビリケンさんを笑学研究所名誉所長として迎え入れました。ビリケンさんのラッキーパワーを追い風に、国際社会で優に伍してゆける大阪人のめ度たい個性を大学の個性に取りこみ、国内外に雄飛する気概ある人材を育成できればと願います。

大学改革とイノベーション

川名 明夫 ● 拓殖大学学長

はじめに

拓殖大学は西暦1900（明治33）年、後の総理大臣桂太郎公爵により、台湾の開発に貢献しうる人材の育成を目的とする「台湾協会学校」として創設された。同時代、後の大学令により大学となった教育機関が多数設立されたが、海外で働く人材の養成に的を絞った拓殖大学の淵源である「台湾協会学校」はユニークなものであった。その建学の精神は「積極進取の気概と、あらゆる民族から敬慕されるに値する教養と品格を具えた、有為な人材の育成」であり、「国際大学」を標榜する本学の使命として脈々と受け継がれてきた。

グローバル化社会と言われる今日、多くの大学に於いてグローバル化、国際化が叫ばれ多くの改革が

進められ、本学の持つ伝統的な「国際大学」としてのユニークさは影が薄くなってきた感がある。しかし、これまでの「国際大学」としての歴史と伝統は本学の宝であり、国際化、グローバル化が大きく叫ばれる今日こそ未来に向けた「国際大学」へ生まれ変わる好機であると捉え、改革に取り組んでいる。本稿では、情報通信技術（ICT）、人工知能（AI）などの目覚ましい技術の進歩の中での、大学改革への取り組みについて述べてみたい。

1 イノベーションの進展と大学改革

筆者は本学着任以前、企業において情報通信分野の研究開発に従事していた。この分野のみならず、近年の技術の進展には目を見張るものがある。1946年に開発されたコンピュータ技術の進展と通信

技術の融合はインターネットを生み出した。これにより、時間、空間の壁が乗り越えられ、世界中のどこであろうとも容易に情報の送受信が可能となり、グローバル化の波を一段と加速することとなった。そして、経済、金融、医療、教育の分野等、あらゆる分野にこの技術が応用され、「ICT革命」とまで呼ばれるようになった。

また、このインターネットを使って、もののつなぎをつないで、直接、情報のやり取りを行うIoTと呼ばれる技術の登場により製造業、物流、農業といった分野にまで「ICT革命」が広がっていった。

さらに最近大きな話題を呼んでいるのがAIすなわち人工知能の研究である。人工知能はこれまで何回か注目を浴び、いつの間にか忘れ去られるといった分野であったが、今回はこれまでとは違った様相を呈している。今までのAIは大量のデータベースを作成し、要求にあったデータを取り出すというものであり、医療診断システムや銀行の案内システムなどに導入され、実際に活用されてきた。また、チェス、将棋といった世界でも、プロを打ち負かすまでになり、最近では、より複雑なゲームである囲碁の

世界でコンピュータが世界チャンピオンを破ったという事で大きな話題となった。

囲碁は、チェスや将棋と比較しても格段にゲームのルールや組み合わせが複雑であることから、コンピュータが世界チャンピオンに勝つにはあと10年は必要と考えられていただけに大きな反響を呼んだ。ここで用いられたAIは以前とは異なり、深層学習という学習機能を備えることにより、人間の脳と同じような機能を実現したと言われている。

昔、人間の脳と同じような機能を持つブレインコンピュータの可能性について討論をしていた時に、「人間の脳は生きている時間だけ学習し、知識を深めている。たとえ、コンピュータで人間の脳と同じような機能を持つように設計しても、学習に時間がかかり人間の脳と同じような機能を持ったコンピュータはできないだろう」といったような議論をした覚えがある。しかし、コンピュータ技術の格段の進歩によって大量のデータを短時間に処理することが可能となり、脳の機能のほんの一部ではあるが、コンピュータ上で実現できるようになったのではないかと思われる。

このAIがIoTと結びつくことにより、無人化された工場や農場、また自動車の自動運転などのスマートシステムが出来上がり、さらに大きく社会構造を変えていくのではないかと言われている。

このように、社会構造の変化の速度がますます加速されていく中で、未来を背負う若者をどのようにして教育すればよいのかということが色々なところで議論されてきた。その集大成が、本年3月に出された高大接続システム改革会議の最終報告であろう。改めて言うまでもないが、今まで「ものを基盤としていた社会が、情報を基盤とした社会へと大きく変化しようとしている。このようにダイナミックに変動する社会で必要とされることは、いわゆる「学力の三要素」を確実に身につけることである。これを念頭に本学での教育改革について以下に述べることにする。

2 本学における改革と「教育ルネサンス」

拓殖大学は2000年に創立100年を迎え、これを機に「拓殖大学ルネサンス」と呼ぶ改革を進めた。この改革の中心はキャンパスの整備事業であっ

た。本学では1977年に、文京キャンパスが手狭になったことから東京の郊外である八王子市にキャンパスを設置し、商学部、政経学部の1・2年生と新設の外国語学部の学生が学ぶ現在の八王子国際キャンパスを開設し、その後、工学部、国際開発学部（現在の国際学部）を開設した。

一方、拓殖大学発祥の地である文京キャンパスは1960～1970年代に建設された施設が多く、老朽化が進み、しかも狭隘であったため、改革の第一歩は建物の刷新から着手された。

2003年には「文京キャンパス再開発プロジェクト」を立ち上げ、マスタープランを策定した。文京キャンパスの再開発には多くの課題があったが、これらの課題をクリアし、2015年1月に全ての建物工事が終了した。その4月から商学部、政経学部は文京キャンパス、外国語学部、国際学部、工学部は八王子国際キャンパスにおいて、1年～4年生まで同一キャンパスで学ぶことが可能となった。この再開発事業により、志願者数を大きく伸ばすことができた。

前述したように、2015年には文京キャンパス

の再開発事業も終了し、それぞれの学部で4年間同一キャンパスにおける教育が可能なシステムとなった。これを機に、将来を見据えた教育改革に取り組むこととし、「拓殖大学教育ルネサンス2020グラウンドデザイン」の策定を行い、教育改革を進めることとした。

本学ではこれまで2回の認証評価を受け、改革を進めてきたが、必ずしも教育改革に関する長期的な展望を示していなかった。今回は、創立120年に当たる2020年における大学像を明らかにしつつ、そこに至るロードマップを描くこととした。前章で述べた通り、急激に変化する社会を目の前にして、必要なのはいわゆる学力の三要素であり、これを本学の建学の精神に沿って展開することとし、国際性、専門性、人間性において到達目標を設定し教育の場で実現していくこととしている。

このような改革において重要なのは、教職員が改革の目標とその意味を共有することである。そのために、この改革を推進するプロジェクトとして「2020 TAKUSHOKU NEW ORANGE PROJECT」を結成し、教職員に対する改革の意識の浸透を図ってい

る。プロジェクトの構成員の多くは若手の職員であり、自らイベント等を企画し、大学全体としての改革の気運を盛り上げている。

本年3月には、各大学における三つのポリシーの一体的な策定と公表が義務づけられた。現在、「拓殖大学教育ルネサンス2020」の中で、具体的作業を進めている。この中で社会のダイナミックな動きに対応して大学を変革することの難しさを強く感じている。特に、社会あるいは産業界の要請に対応した人材を養成するためには、大学の人材リソースに大きな問題がある。

現在、ICTやAIが産業界に浸透するに従い、その分野の人材の不足が指摘されている。大学がこれに応えようとしても、大学自体にこれらの教育を行える人材が不足している。先端的な分野の人材育成には、企業の力を借りることが不可避である。インターンシップ、寄付講座の開設、講師の派遣等を通じて新しい分野の基礎を企業から大学に移入するとともに、企業と大学との間の人の流れをよりスムーズに行えるようなシステムの検討が必要である。